

まっっている
舟越 幸子

ぼくは この家の縁台だ
ずっと前に 大工の父さんが造ったんだ
子供達の為に だから大きくて丈夫だ
大喜びの子供達は

宿題をするのも 友達と遊ぶのも
すいかを食べるのも
ぼくの所さ

ばあさんが お客に茶を出すのも
手ぬぐいをかぶった おばさん達の
しゃべくりも みんなここさ
ぼくの周りの毎日は
にぎやかで楽しかった

子供達は大きくなり
ばあさんが逝き 父さんも逝った
一人残った 母さんも逝った
毎日が静かになり
雨戸が閉ったままになった

天気の良い日は

子供が帰って 雨戸を開け
部屋中の窓を開ける

白いカーテンが ふわふわ揺れて
ぼくの上を かすめてく

ああ…ぼくは この時が一番好きさ
だって 母さんが

いつも そうしていたからね
(かあさんか…)

ぼくは まだまだ大丈夫

子供達よ 忘れないで

ぼくはいつでも ここで待っている
元気な ただいまの声 聞けるのを…
まっっている…